
のほうにはあの思い出が、ほのかに、健やかに、寢息を立てて、いまでも夢を見ているというの

春風吹湖面花散夏雨降川面魚跳秋笛吹実果实冬雪降祈人々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「西のほうにはあの思い出が、ほのかに、健やかに、寝息を立てて、いまでも夢を見ているというので」

【Nコード】

N2526L

【作者名】

春風吹湖面花散夏雨降川面魚跳秋笛吹実果実冬雪降祈人々

【あらすじ】

思い出の中で、彼は言うのだった。

「そこには、呪文が刻まれているんだ。魚たちだけが読むことのできる呪文が」

無邪気な声で、言うのだった。

思い出の中で、彼は言うのだった。

「その奥には、精霊が眠っているんだ。この森の守り神だよ」

無邪気な声で、言うのだった。

そして彼と離れてから長い年月がたち、また再び、彼と再会するこ
とになる。

無邪気だった彼は、いまも無邪気で、彼の周りの風景も、思い出の
ままだった。

でも、誰も思い出のなかには帰れないんだ。

振り返れば、そこでは、新しい物語が始まっていたのだから。

序章 / 東レインタラ鉄道

「ケイ、また、あえるんだよね?」

「うん、今度はウィクシアンの花が咲いているといいなあ」

「それなら、5月ごろにおいでよ。案内してあげる。とっておきの場所があるんだ」

「わかった。5月ね。また、いつかの5月」

「うん、また。いつかの5月に」

／
／

「大岡さん、ほら、もうそろそろ着きますよ。起きてくださいよ」
あれは、山城の声だ。山城亜季。みんな彼女のことをあつきーと呼んでいる。さあ呼んでみよう。

「あ、あつきー」

「あ、あつ?や、やっと起きましたか。っていつか大岡さんが私のことあつきーって呼ぶの珍しいですね」

「ああ、すまん山城……。ねむい。いや、ねぼけてた」

「知ってます。大岡さんもご存じだと思いますが、私たちの目的地は終点じゃないんですからね。そろそろ準備しないと」

「ああ。すまん」

山城の視線をやや感じつつ、支度をすすめる。もっとも、支度といつても鉄道旅行の程度だ、たいしたものではない。余裕を持って終えることができた。ふと車窓に目を移すと、そこには一面の草原と、薄青の空とがひとつの調和した風景をつくっている。山城も車窓からみえる風景を楽しんでいるようで、その横顔は穏やかだった。それらをゆったりと眺めていると、やがて風景にちいさな街が割り込

んできた。

「そろそろだな」

「ええ、いきましようか」

「ああ、いこうか」

二人はいままで定位置だった座席から腰をあげる。鉄道がちょうど駅舎についたところだった。そのまま、鉄道のそとへ一歩踏み出すと、さわやかな初夏の風がふわりと全身を包んでいくのが感じられる。おもわず、両手を天のほうへ突き上げて、ぐうんと伸びをする。

「なんだか大岡さんってすごく大人っぽかったり、子供っぽかったりしますよね」山城が笑う。

「おお、そうか？」

「なんとなく、ですけどね。いきましようか？」

山城はにこりと笑って歩き始めた。

「なあ、山岡」

「なんですか」

くるりと回って山城がたずねる。長い髪が、すこし風になびいた。

「改札、そっちじゃないぞ。こっちだ」

そういつて私は親指で自分の後方を指差す。そして、ゆっくり歩き始めた。

「あ、そ、そうですね」

山城は少し照れたようにしてこちらについてきた。こういうしぐさを見ると、何となくかわいいような気がして、何となく、こまる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2526/>

「西のほうにはあの思い出が、ほのかに、健やかに、寝息を立てて、いまでも

2010年10月10日01時04分発行